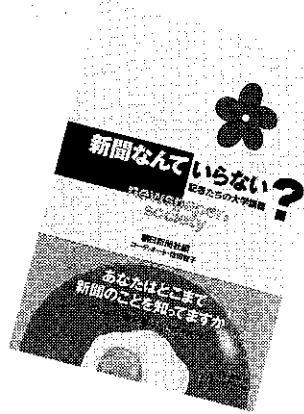


▶新聞なんていらない？

記者たちの大学講義
9・30刊 A5判240頁 本体1200円
朝日新聞社



ではもう「読んでいない」ことを前提に大学生とつきあわねばならなくなっている。もうひとつ、最近のNHKを取り巻く一連の問題のなかで、最高首脳のひとつが「NHKは国営放送じゃないの」と言われてだいぶショックを受けたという。ところが、もうずいぶん前からNHKへ入局の新社員でさえ、堂々と「NHKは国営放送」と思

っているものが大半なのに、そのトップが現実の若者の情報環境の変化やメディア観への認識に違いがあることにこれまで（いや今でもか）疎ま

きたのではないかと、疎まらざるに読み取れるかという

と、冒頭に述べたようにいささか気にはなる。

それでも、最近の調査（マクロミル、朝日、二〇〇五・二・四）によれば、大学生・短大生の就職活動の「三種の神器」はインターネットと新聞、そして携帯電話であるという。新聞は面接対策として

時事問題を勉強し、業界を研究するために読まれているよう

だ。

新聞を読むとは言いが、テレビは見（視）るという行為が五〇年続いてきた。「テレビなんていらない」と言われ

る前に、そろそろ「あなたは何を

読んでいますか」という風に変えてもいいのではないか。

（上智大学文学部教授・新聞学）

多面的なアプローチで新聞に迫る

現実の若者の情報環境の変化や
メディア観への認識を見据えるべき

鈴木雄雅

本書は朝日新聞の現役記者らが多摩地域を中心とした大学組織「ネットワーク多摩」の大学で行った提携講座（二人の第一線記者による九回分講義）をまとめたものである。新聞を読まない人たち、とりわけそうした若者層の増加に危機感を覚えている新聞社がいま積極的に大学に進出している。大学ばかりでなく、小中高校へ「出前授業」する様子もしばしば紙面に登場する。

それらに賛否両論もあるが、タイトル「新聞なんていらない？」は刺激的だ。大学生・新聞界を軸とした社会文化論でもあるから、中味も面白い、と思うのはそれを読む読者にもよるだろう。と言うのは、この本を読む読者がそれなりに新聞メディアというコミュニケーションの意義や意味合い、そして変化に関心が強い者であるとしたらだ。そうであれば、本書が出版された意味も倍増するだろう。ところがそうでなければ……。

現場の記者らが大学で講義を半年あるいは一年あまりすると、「近頃の大学生は新聞を読まない」「新聞を読ませるよかに」といった苦言をしばしば呈することが珍しくなかった。ところがその彼らが大学へ天下りして間もなく、そういうことは言わなくな

る。いや言えなくなる。なぜなら学生の実態（メディア観）を知ってしまうからだ。最近

ノンフィクション